

「連合2019平和行動in広島」派遣団報告

原爆の悲惨さと平和の尊さを再認識し、自らも運動継承者となること誓う ～連合平和ヒロシマ集会に、全国から2,316名が結集～



「連合2019平和ヒロシマ集会」(上)と「平和シンポジウム」の様子

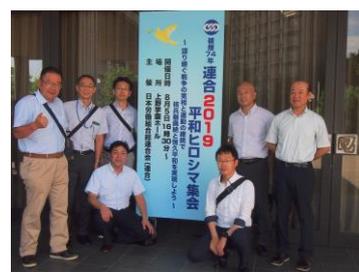
8月6日(火)午前8時15分、広島は74年目のその瞬間を迎え、14万人もの尊い命を奪い、そして今も後遺障害に苦しむ多くの被爆者の方々や全国から5万人に及ぶ参加者が、鎮魂と平和を祈り黙祷を捧げた。平和祈念式典の席上、松井広島市長は「人類の悲劇を二度と繰り返してはならない。日本政府には、世界で唯一の被爆国として、核兵器不拡散条約への署名・批准を求める」旨の平和宣言がなされた。続いて、安倍総理からは「核保有国と非核保有国の橋渡し役を担い国際貢献していく」旨の米国や中国などへの配慮ともとれる発言は、「少なからぬ被爆された方々や参加者と国民を落胆させるものだったのではないだろうか?」と感じました。



平和集会に参加した派遣団の皆さん

「連合2019平和ヒロシマ集会」、そして「2020年核兵器不拡散条約再検討会議に向けた平和シンポジウム」は、前夜の8月5日(月)16時30分～広島上野学園ホールにおいて、全国の構成組織・地方連合会から2,316名が参加し開催された。連合・逢見会長代行の「来年開催される核兵器不拡散条約再検討会議に向け日本政府に求められる課題・姿勢」を込めた主催者あいさつがなされた。印象的だったのは、全国の高校から選ばれた高校生平和大使(23名で構成)からの「一人ひとりの力はビリョクだけどもリョクではない!」の活動表明は、とても印象的でした。

私たち連合福島は、県内一円から7名で組織する平和ヒロシマ派遣団として参加し、原爆の悲惨さと平和の尊さを再認識し、自らも運動継承者となることの誓いを新たにしました。また、連合福島青年・女性委員会や各地域を含めた事務局職員の皆さんが心を込めて折った「千羽鶴」と「ふくしまの名水」を献納し、慰霊と鎮魂の意を込め、恒久平和の祈りを示してきました。



平和集会会場前の派遣団の皆さん

二日目、広島市主催の平和祈念式典のあとは、視察研修として、昨年豪雨災害に見舞われ、連合福島として災害救援ボランティアを派遣し、3班に渡り作業に携わった「呉市天応地区」の被災地を訪れました。しかしながら、1年経っても未だ復旧には程遠い民家、未整備の河川・道路を目の当たりにし、心も痛み、そこで記念写真を撮る気にはなれず、皆で早期復旧と生活再建を祈るばかりでした。



原爆ドームの前にて

編集後記：初対面同士であっても、3日間行動を共にし、会話することで、絆が深まり強まり、チーム連合福島と化し、達成感の中で打ち上げることができました。お疲れ様でした。

(記：副事務局長 遠藤徳雄)